里山保全目標設定のための都市部ボランティアの 里山に関するイメージ分析

－ 「季節」と「竹林伐採の有無」の観点からの検討 －

○高橋直¹・前川均（非会員）²・谷光清²（非会員）

（¹千村ネイチャー倶楽部・²（株）日立製作所）

キーワード：里山、イメージ、都市部ボランティア

Image analysis of Satochi-Satoyama of urban volunteers for target setting of conservation and sustainable use

Nao Takahashi¹, Hitoshi Mackawa^{2,*} and Mitsukiyo Tani^{2,*}

（¹Chimura Nature Club, Hitachi, Ltd²）

Key Words: Satochi-Satoyama, image, urban volunteers

目 的

人々の営みがつくりだした里地里山には、人と自然のかかわりの歴史を通じて、集落を中心に資源が循環し持続的に自然の恵みを享受する空間が形成・維持されてきた（里地里山保全行動計画, 2010）。しかし、農林業の衰退や少子高齢化による過疎化などが原因で、中山間地域の荒廃は急速に進んでいる。このような中山間地域における生態系保全のために環境 NPO 団体をはじめとした様々なボランティア団体による里地里山保全活動が行われている。

里地里山保全活動が、農林業者や地域住民だけではなく都市部のボランティアをはじめとした多くの人々によって支えられるという将来像（生物多様性国家戦略 2010）を具体化するためには、都市部のボランティアをはじめとした里山に関する知識が十分でない人々にも支持される保全目標を設定するための方法を開発する必要がある。

そこで本研究では、そのための基礎的な取り組みとして、都市部のボランティアをはじめとした人々が、里山保全活動として一般的に行われている広葉樹林における竹林伐採に関する印象を評定することによって、里山保全活動によって復元された山林の姿をどのように感じているかを調べる。

方 法

調査実施期間 2012 年 4 月から 7 月

調査を実施した場所 生き物の里（千村）

調査対象者 生き物の里（千村）において千村ネイチャー倶楽部が主催して行ったボランティア活動の参加者全員。複数回参加した人には一度だけの回答を求めた。

測定項目 SD 法を用いた里山の印象を測定する 24 項目（「やわらかい かたい」など）を用いて、①夏の竹林伐採済みの里山の一部の写真、②夏の竹林伐採なしの里山の一部の写真、③冬の竹林伐採済みの里山の一部の写真、④冬の竹林伐採なしの里山の一部の写真的合計 4 枚の印象を 7 段階で測定した。24 項目は写真の印象評定と現場での森林の印象評定の比較を行い差が少ないとされた質問項目を参考に作成した。またそれぞれの写真の好感度を 7 段階尺度（非常に好き かなり好き やや好き どちらでもない やや嫌い かなり嫌い 非

常に嫌い）で測定した。

結 果 と 考 察

有効回答数は 70 名（男性 46 名 65.8%、助成 24 名 34.3%）。年齢の最頻値は「41 才から 50 才」の 25 名（35.7%）であった。

4 枚の写真のイメージを評定するための各項目に関する都市部ボランティアの人々の回答の平均値に差があるかどうかを一元配置の分散分析を用いて調べた。

その結果、項目 3（閉鎖的な 開放的な）以外の 23 項目の回答に 1%水準で群間の有意な得点差があることがわかった。

群間の得点差がみられた項目に関して多重比較を行ったところ、6 組中 5 つの組み合わせで有意な得点差がみられた 11 項目は感情的な内容を示す形容詞対が多く見られ、「夏よりは冬がよい。冬ならば伐採ありより伐採なしの方が良い」という傾向が見られた（タイプ A）。

一方、6 組中 2 組以上 5 組以下で有意な得点差が見られた 7 項目の形容詞対に関しては、「伐採があるなら冬より夏がいい、冬なら伐採がないほうが良い」という傾向が見られた（タイプ B）。6 組中 1 組以下しか有意な得点差がみられなかった 6 項目は、「冬伐採なしは冬伐採ありより良い」、などの一組もしくは何の順序も示さないことがわかった（タイプ C）。タイプ B・タイプ C には、ともに空間的なイメージを示す形容詞対が多く見られた。同様の傾向は、「季節条件」と「伐採条件」の効果をより詳しく調べるために行った 2×2 の分散分析の結果にも示された。

以上の結果から、都市部のボランティアは「あたたかい」「美しい」といった感情的内容を示す形容詞対（タイプ A）を 4 枚の写真を弁別する材料として使用している可能性が示唆されたと考えられる。都市部のボランティアは、タイプ A の形容詞対で異なる里山の印象を全体的に順序づけて判断し、「閉鎖的な」「きゅうくつな」「閑散とした」「スッキリした」といった空間的イメージを示す形容詞対（タイプ B・タイプ C）を 4 枚の写真の関係性の一部を判断する材料として使用している可能性が示唆されたと考えられる。

都市部ボランティアは、里山の印象を評定しようとする際、感情的形容詞対によって写真の評価順序を決め、補助的情報として空間的形容詞対に関する印象を用いている可能性があることがわかった。